

743 大腸癌切除不能肝転移に対する動注化学療法の検討

市立池田病院 外科, 同放射線科*

柴田邦隆, 徳永 仰*, 尾田一之, 和田 尚, 村田 賢, 富永修盛, 松田泰樹, 太田俊行, 島野高志

【目的】当院で動注化学療法を施行した大腸癌切除不能肝転移症例の治療成績を解析しその意義を検討した。

【対象】95年1月から98年11月の間に大腸癌肝転移切除不能症例に対して動注化学療法を行った16例。

【方法】GD-Coil法を用いてカテーテルを留置し左鎖骨下動脈にて埋込みリザーバーに接続した。投与方法は主にFP療法のプロトコルに従い、外来で1-2週に1回5時間持続投与方法にて行った。【結果】年齢は37-83歳(平均66.9)男女比9:7同時性:異時性9:7。CR1例PR5例MR2例NC7例PD1例であり、腫瘍マーカーの変動とほぼ相関した。奏効率は37.5%。生存期間は108-1035日であり50%生存期間は360日。Grade3以上の副作用は無く全例在宅治療が可能であった。癌死した9例のうち肝不全死は3例であった。【考察】当院における肝動注化学療法の奏効率は37.5%であった。副作用は軽微で全例在宅治療が可能であった。原発巣の切除と遠隔転移が肝に局限していれば本療法が予後の向上に寄与すると考えられた。

744 大腸癌、胃癌におけるPyNPase、DPD値の検討

東邦大学第2外科

磯貝正博, 若林峰生, 岡本康介, 島山知昭, 緒方秀昭, 本田善子, 佐藤雅彦, 牛込充則, 中野太郎, 村国 均, 高塚純, 柴 忠明

【目的】胃癌、大腸癌組織におけるPyNPase活性とDPD活性を測定しその意義について検討を行った。

【対象及び方法】胃癌20例、大腸癌28例(結腸癌20例、直腸癌8例)の腫瘍部分と隣接する正常部分のPyNPase活性とDPD活性を測定した。【結果】胃癌では、正常組織に対し腫瘍のPyNPase高値・DPD低値は8例(40%)にすぎず、逆にPyNPase低値・DPD高値が4例(20%)であった。一方、同様の対比で大腸癌では、PyNPase高値・DPD低値は22例(78%)、PyNPase低値・DPD高値は直腸癌の3例(11%)のみであった。腫瘍内のPyNPase/DPD値は、大腸癌で胃癌より高率に高値をした。【結語】腫瘍におけるPyNPase、DPDの発現様式より、5'-DFURは大腸癌により高い有効性が推察されたが、胃癌の中にも同様の発現様式が認められ効果が期待された。PyNPase・DPDの測定は、同薬剤の効果や投与量を決める因子となる可能性が推察された。

745 門脈血中免疫抑制酸性蛋白と腫瘍組織中炎症性サイトカイン濃度との関連

三重大学第2外科

岩永孝雄, 三木誓雄, 石島直人, 鈴木宏志

(目的)今回我々は、IL-6が誘導しIL-6の産生にnegative feedbackをかけるIL-1raの腫瘍組織中の濃度と門脈血中IAPの関連を評価し、IAPが腫瘍組織における増殖拮抗能を反映しているかどうか検討した。(方法)大腸癌患者68例を対象とし、末梢静脈血中及び腫瘍drainage vein中IAP濃度を測定し、臨床病理学的事項との関連を検討した。なお腫瘍組織及び腫瘍近傍正常組織のIL-1raの濃度を測定した。また癌組織において、IL-6、IL-1raの存在を免疫学的染色法にて確認した。

(結果)腫瘍drainage vein中IAPは、腫瘍最大径と正の相関を示し、肝転移、リンパ節転移、深達度高度の症例で高値を示した。また腫瘍組織中IL-1raは、腫瘍近傍正常粘膜組織中IL-1raより有意に高値であった($p=0.0003$)。drainage vein中IAP値は腫瘍組織中IL-1raとは負に相関していた($r=-0.311$, $p=0.0265$)が、正常粘膜組織中IL-1raとは関連がなかった。

(まとめ)腫瘍そのものより産生されるIAPが、腫瘍増殖能のみならず局所における腫瘍増殖拮抗能を反映していると考えられた。

746 大腸癌における術前CEAおよびCA19-9値の検討

東京医科歯科大学第二外科

星野直明, 吉永圭吾, 桐原正人, 長谷川久美, 角崎秀文, 大野玲, 兼子順, 豊岡正裕, 榎本雅之, 杉原健一

(目的)CEA、CA19-9は代表的腫瘍マーカーである。今回大腸癌症例の術前CEA値およびCA19-9値と転帰の関係について検討した。(対象と方法)対象は1988年3月から1994年3月まで手術を施行した大腸癌症例で術前CEA、CA19-9を測定した179例を対象とした。CEAは2抗体法、CA19-9はIRMA法で測定し、それぞれのcut off値は5.0ng/ml, 37U/mlであった。CEA高値CA19-9高値をHH群, CEA高値CA19-9正常をHN群, CEA正常CA19-9高値をNH群, CEA正常CA19-9正常をNN群とし、それぞれの癌の病期分類および累積5年生存率について比較検討した。(結果)大腸癌179例中CEA高値は58例(32.4%) CA19-9高値は50例(24.6%)であった。HH群、HN群、NH群、NN群はそれぞれ26例(15%) 32例(18%) 18例(10%) 103例(57%)であった。StagelIIa以上の症例はHH群18例(69%), HN群15例(45%), NH群9例(50%), NN群30例(29%)であった。HH群と他の3群間に有意差を認め、HN群、NH群間に有意差は認めなかった。また累積5年生存率はHH群で39%、HN群で70%、NH群で63%、NN群で88%でありHH群と他の3群間に有意差を認めたが、HN群、NH群間に有意差は認めなかった。(結語)術前CEA、CA19-9値が高値のHH群は他群と比較し組織学的病期が進行しており、有意に予後不良であった。